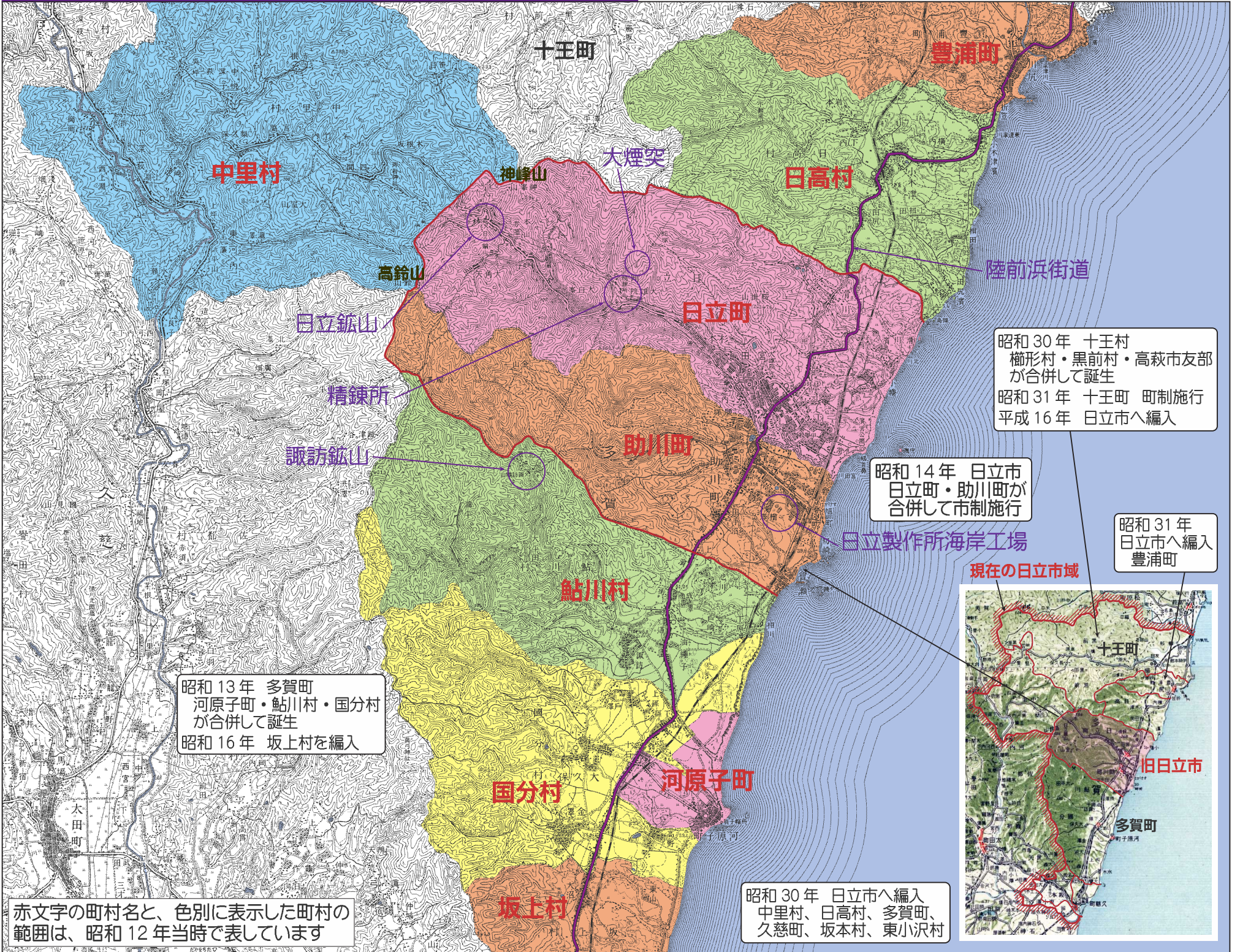


戦前の日立市中央部と戦後の市域の移い変わり

5 万分 1 地形図「常陸太田（昭和 5 年修正）」（部分拡大、水部を水色に着色）



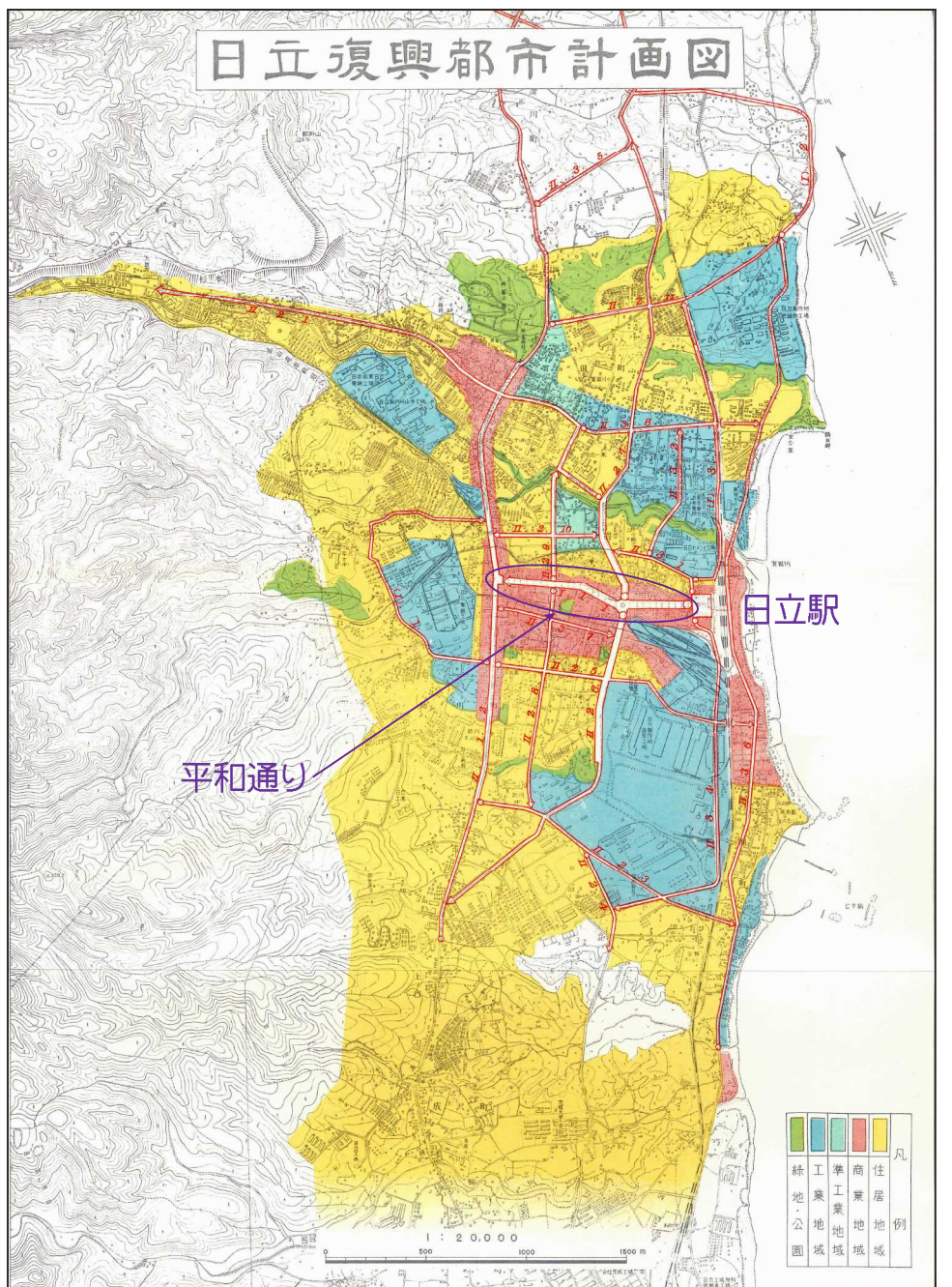
※櫛形村友部は昭和 29 年の高萩市市制施行時に高萩市に入るが、昭和 30 年、櫛形村・黒前村と合併し十王村となる

昭和 14 年（1939 年）、陸前浜街道（岩城相馬街道）の宿場町として栄えた助川町と、明治時代の終わりがちから日立鉱山・日立製作所を中心に発展を続けてきた日立町が合併して日立市が誕生しました。

日立市は鉱工業都市として成長著しく、昭和 19 年（1944 年）には茨城県下最大の都市となりましたが、太平洋戦争の末期には連合軍による激しい攻撃にさらされました。昭和 20 年（1945 年）6 月 10 日には工場の操業開始間もない時間帯に B29 の大編隊による爆撃を受け、日立製作所海岸工場が壊滅しました。7 月 17 日の夜半には米英連合艦隊による沖合からの艦砲射撃で住宅地に大きな被害が生じました。さらに 19 日深夜には再び焼夷弾による爆撃があり、これらの攻撃により市街地のおよそ 7 割が廃墟と化しました。

戦後復興は、平和産業に切り替えをした日立製作所の操業再開とともに、常磐線日立駅前から国道 6 号を結ぶ広幅員の街路（平和通り）を基幹通りとして街路網を整備し、産業都市の再建をめざしました。

さらに、ともに戦災都市に指定された多賀町や豊浦町をはじめ隣接する町村を合併し、市域の拡大が図られました。



（戦災復興誌第 7 巻 昭和 34 年 建設省）

鉬工業都市日立のシンボル 大煙突

【1975年1月15日 13時ごろの撮影】

大正3年（1914年）、精錬所から発生する亜硫酸ガスによる煙害を防ぐ目的で、工場裏手の山の斜面、標高325mの地点に高さ155.7m（500尺）の大煙突が建設されました。

昭和47年（1972年）、密閉型の自溶炉が採用され、無公害化が実現した後も、大煙突は企業と地域の共存共栄のシンボルとして市民に親しまれてきましたが、平成5年（1993年）2月、下部3分1程度を残して、突然倒壊してしまいました。



【ダルマ煙突】

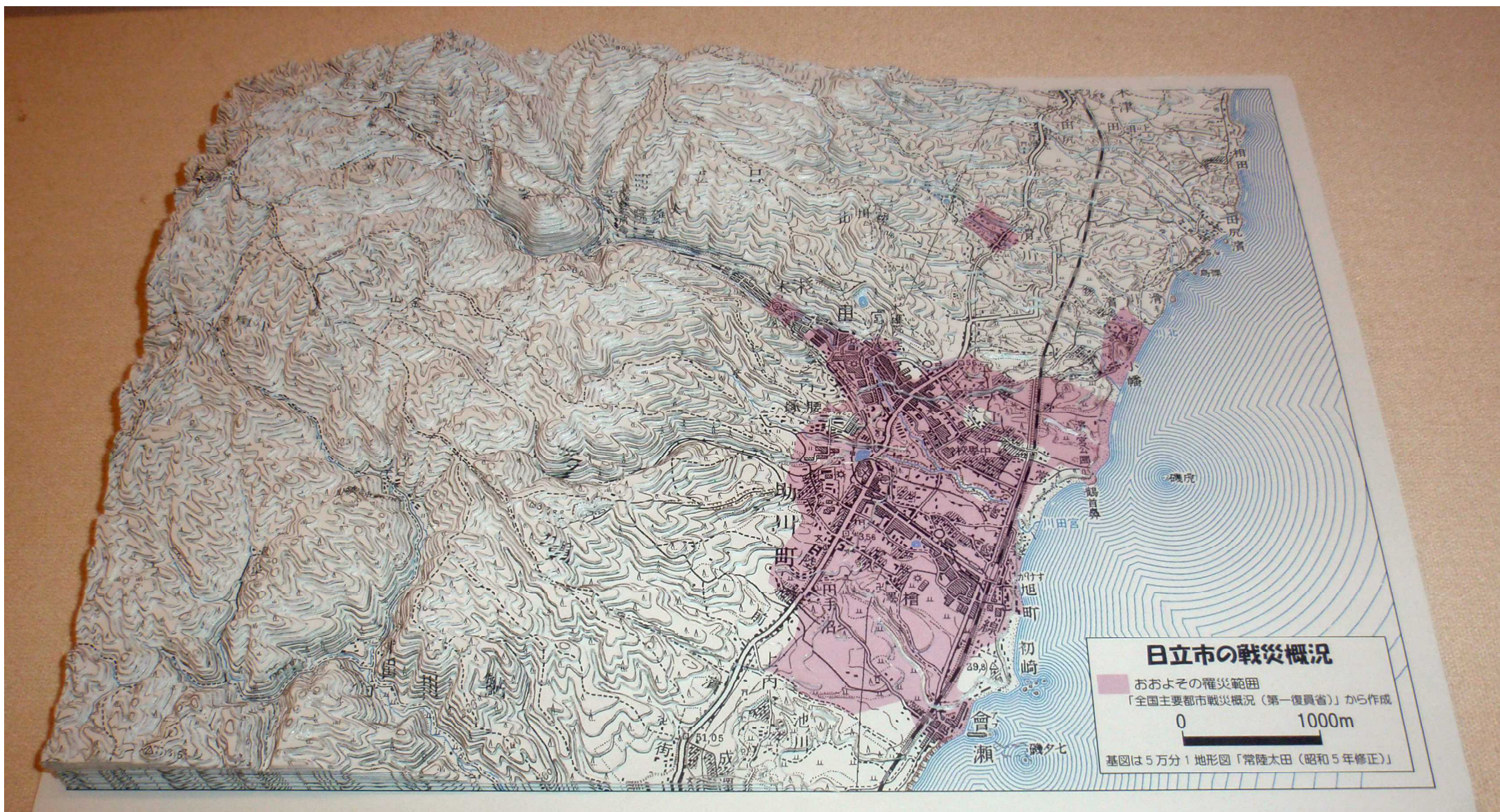
大正2年（1913年）に政府の命令で建設された高さ36m、内径18mのずんぐりとした煙突。排煙を希釈する構造をもつとされたが、効果を上げることができずかえって煙害を増大させたので、地元では「阿呆煙突」と揶揄された。

大煙突

ダルマ煙突

精錬所と大煙突

長く伸びた影からも煙突の高さをうかがい知ることができます



日立市の戦災概況

おおよその罹災範囲
「全国主要都市戦災概況（第一復興省）」から作成

0 1000m

基図は5万分1地形図「常陸太田（昭和5年修正）」

戦災地立体地形模型「日立」